

片桐洋一著

明治書院

勢物語の研究
〔研究篇〕

著者略歴

片桐洋一^{かたぎりよういち}。昭和六年九月五日生。

昭和三十四年 京都大学大学院博士課程單

位所得。

現在 大阪女子大学助教授。

専攻 平安時代文学史。

著書 拾遺和歌集 本文篇・校異篇。

後撰和歌集総索引（共著）。

伊勢物語の研究〔研究篇〕

¥ 4,800

昭和四十三年二月二十五日 初版発行
昭和四十五年二月 十五日 再版発行

著者 © 片桐洋一

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 岡崎正夫

発行者 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六
郵便番号 一〇一番

電話東京（二九四）五三三六（代）
振替口座 東京 四九九一番

目次

第一篇 歌物語の発生と展開

第一章 歌物語の基本形式……………	三
第二章 歌物語の淵源と歌語り……………	一六
第三章 歌語りから歌物語へ——歌物語の成立——……………	三七
第四章 歌物語の構成……………	五九

第二篇 伊勢物語の成立と業平集 (一)

第一章 古本業平集の吟味……………	九
第二章 類従本業平集と歌仙本業平集——現存本業平集の概観(一)——……………	一〇三
第三章 在中将集について——現存本業平集の概観(二)——……………	一一〇
第四章 雅平本業平集について——現存本業平集の概観(三)——……………	一二四

第三篇 伊勢物語の成立と業平集 (二)

第一章	伊勢物語の成立と成長……………	一五
第二章	在中將集と雅平本業平集の再検討……………	一六
第三章	在中將集と雅平本業平集の比較考察 (一)——大和物語との關係……………	一七
第四章	在中將集と雅平本業平集の比較考察 (二)——伊勢物語の成長と和歌の付加……………	一九
第五章	在中將集と雅平本業平集の成立年代……………	二〇
第四篇 現存本伊勢物語の成立		
第一章	現存本伊勢物語とその母体……………	二九
第二章	現存本伊勢物語の形成……………	三六
第五篇 伊勢物語の原型とその成立		
第一章	類従本業平集の典拠……………	三六
第二章	原型伊勢物語の形態——古今集と伊勢物語……………	三七
第六篇 伊勢物語の成長と構造		
第一章	伊勢物語の方法と成立過程……………	三九
第二章	伊勢物語の注釈と成立過程……………	三三

第七篇 伊勢物語の伝流と本文

第一章 平安時代の伊勢物語……………	三七
第二章 現存初冠諸本をめぐって……………	三七
第三章 百二十五段本と定家本の成立……………	三九八

第八篇 伊勢物語の享受と研究

第一章 平安時代における伊勢物語の享受……………	四六三
第二章 和歌知願集とその末書……………	四七四
第三章 冷泉家流伊勢物語古注をめぐって……………	五二四
第四章 その他の鎌倉時代注釈書……………	五三二
第五章 鎌倉時代勢語注釈書の方法……………	六〇七
第六章 鎌倉時代勢語注釈書の影響……………	六三三
第七章 伊勢物語注釈研究のために——荷田春満の勢語注釈に関連して——……………	六四六

あとがき

第一篇

歌物語の発生と展開

第一章 歌物語の基本形式

一

「歌物語は歌集の詞書の発展したものである。」逆に言えば、「歌集の詞書から歌物語が出来たのだ。」という認識は、全く疑われることもなく、長い間にわたって学界の通説とされて来た。あまりにも当然な説のごとくに扱われて来たゆえに、特定の先学の所説を引用してそれを代表させることも憚られるほどである。しかし、歌物語は、はたして歌集の詞書が発展したものと言い切ってしまうのであろうか。

歌物語——この言葉は必ずしも古いものでも、また由緒のあるものでもないが——の発生と本質を考える大前提は、歌物語もまた物語であるという事実であると思う。そして、物語とは、発生の段階においては、口で語るもの、すなわち「語りごと」以外の何物でもなかったということ、もう一度認識してかかる必要があると私は思う。

伊勢物語や大和物語のような、今日歌物語と称せられている作品が、物語発生段階におけるそのように、単なる「語りごと」に過ぎなかったと思う人はまさかあるまい。物語音読論の説くように、^(注2)当時の物語作品がすべて声を出して読み上げられるものであり、したがって現存の作品が音読のための台本のごときものであったとしても、それはもはや太古において森の中で火を囲みながら人々が物語った、あるいは今もなお地方において、年老いた人が僅かにその形骸を伝えている「昔話」の類とは根本的に質を異にしていたはずである。あの竹取物語が、伝承説話の「竹取譚」をもとにしながらも、数々の脚色を加えて漢学者によって文字化せられたように、歌物語の場合も、少なくとも

今日伝わっているものは、伝承され口誦されていた和歌説話そのままではあるまい。ここで、今すぐに文芸性の探求を問題にしないにしても、作品として残る伊勢物語・大和物語には、やはりそれら「語りごと」の類とは根本的に相違する何物かがあったと考えたいのである。

しかし、文学としての歌物語といえども、前述のごとく、口誦され伝承された和歌説話を基盤にして生まれたものであることは間違いない。否、発生期のみならず、伊勢物語・大和物語などの歌物語の最盛期においても、文学としての歌物語は、口誦的、伝承的なそれを基盤とし、その方法を、おおむね用いていたと言いつつよいに思うのである。

この意味において、阪倉篤義博士が、係助詞「なむ」の用法から、歌物語の文体を「語る文体」としてとらえ、「説明する文体」である歌集の詞書とは本質的に次元を異にするものであると説かれたのは、まことに示唆的であつた。^(注3)我々は、記述された、あるいは印刷された形で見るゆえに、和歌の詞書と歌物語の文章との共通点ばかりに目を引かれるが、当時、物語や歌集が生きていた平安時代においては、その差は全く歴然としたものがあつたと思うのである。物語そのものの、あるいは平安時代の物語文学の本質については近く別に詳論する機会が与えられているのでそれに譲るが、^(注4)叙述の必要上、今問題にしている歌集の詞書と物語文との相違の根本だけについては、ここで触れておかねばなるまい。

伊勢物語でもそうだが、たとえば大和物語を見ると、甚だ短い文章しか持たぬ章段の存在に気づく。たとえば、^(注5)

陽成院の一條の君、
おくやまに心をいれてたづねずはふかき紅葉の色を見ましや
閑院のおほい君、

(四七段)

むかしよりおもふ心はありそ海の浜のまさごは数もしられず

(一一八段)

などは、物語の文章が作者名の記述のみという徹底した短さなのである。また、

かいせん、山にのほりて、

雲ならでこだかき峯にゐるものはうき世をそむくわが身なりけり

(五〇段)

公平がむすめ、死ぬとて、

(一一六段)

ながけくもたのみけるかな世の中を袖に涙のかかる身をもて

なども、前の例に歌をよむ時の状態の説明が加わったものに過ぎない。

このような甚だ簡単な地の文の記述に比べれば、歌集、たとえば古今集の詞書の方が長く複雑なものが多い。

春日の祭にまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家をたづねてつかはせりける

壬生忠岑

かすが野の雪まをわけておひいでくる草のはつかに見えし君はも

(古今集 四七〇)

人の花つみしける所にまかりて、そくなりける人のもとに、のちによみてつかはしける

貫之

山ざくら霞のまよりはのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

(古今集 四七五)

などの方が、よほど長く、かつ複雑である。こう見て来ると、和歌に付随する文章の長い短いということでは、和歌の詞書と歌物語の文章との区別は出来ないことになる。

それでは、両者の差違の根本はどこにあるのか。私は、先に掲げた大和物語の四七段・一一八段・五〇段・一一六段などの例をもう一度凝視することからこの問題の究明を始めなければならぬと思う。つまり、これほど短小であっても物語文の役割をはたしているということは、とりもなおさず、この形こそが歌物語の基本形式にはかならないと思うからである。

陽成院の一條の君、

おくやまに心をいれてたづねずはふかき紅葉の色を見ましや

(四七段)

閑院のおはい君、

むかしよりおもふ心はありそ海の涙のまさごは数もしられず

(一一八段)

を見ると、物語の地の文は「陽成院の一条の君」「閑院のおはい君」だけに過ぎない。これらが「陽成院の一条の君のよめる歌」「閑院のおはい君のよめる歌」の省略形であるにしても、「ある人物が歌をよんだ」ということを伝えさえすれば物語として成り立ち得るということにはかならない。つまり、和歌と、それをよんだ人物を提示しさえすれば歌物語としての形は整うということ、換言すれば「誰々」が「歌」をよんだと言いさえすれば、「歌物語である」ということになるわけである。

かように考えてくれば、我々は、伊勢物語や大和物語などの歌物語が、歌を含んでいることは勿論ながら、「昔、男ありけり」とか、「昔、男」とか（伊勢）、「亭子のみかど」「故源大納言」「野大貳」（大和）とかいうように、主人公を提示することによって物語を始めていることが決して偶然でないことを知り得るのである。

そう言えば、歌物語に限らず、平安時代の物語が、たとえば、

今は昔、竹取の翁といふものありけり。

(竹取物語)

むかし、式部大輔左大弁かけて清原の王^{おきみ}ありけり。

(うつほ物語 俊蔭)

むかし、藤原の君ときこゆる一世の源氏おはしましけり。

(うつほ物語 藤原の君)

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなききははあらぬがすぐれて時めき給ふありけり。

(源氏物語 桐壺)

その頃、世に数まへられ給はぬ古宮おはしけり。

(源氏物語 橋姫)

などのごとく、そのほとんどが人物の提示紹介から始まっており、宮廷文学としての物語ではないが、たとえば今昔

物語などの説話文学においても、

今は昔、聖武天皇の御代に玄昉といふ僧ありけり。

今は昔、熊野に参る二人の僧ありけり。

今は昔、般若寺といふ寺に覚縁律師といふ人住みけり。

などのように、人物の提示・紹介から始まるのが通例の形であり、稀に「……ありけり」という形をとらぬ場合がある。

今は昔、天智天皇、志賀郡、粟津の宮におはしける時に……

のように人物を最初に提起することは変わりなく、また、

今は昔、駿河の国と遠江の国との堺に一つの河あり。大井河といふ。その河上に鵜田の郷といふ所ありけり。これ遠江の国の榑原はきはらの郡のうちなり。しかるに、大炊の天皇の御代に、天平宝字二年といふ年の三月のころ、仏の道を修行する一人の僧ありて……

というように、始めは山川の紹介が記述されていても、間もなく、時代を設定して、人物を紹介するという形をとっていることが知られるのである。

それに対して、先の古今集の詞書を見ると、

春日の祭にまかれりける時に、物見に出でたりける女のもとに、家をたづねてつかはせりける

人の花つみしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、のちによりてつかはしける

などの場合、「つかはせりける」「つかはしける」は「つかはせりける歌」「つかはしける歌」の意であって、直接に和歌へ続いてしまい、作者名の「壬生忠岑」や「貫之」は、いわばその注記として存在するに過ぎない。

壬生忠岑、春日の祭にまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家をたづねてつかはせりける

と訂することは、物語としての形を持つ、

躬恒が院によみてたてまつりける、

たちよらむ木のもともなきつたの身はときはながらに秋ぞかなしき

(大和物語 三三段)

を、歌集的な

宇多院によみてたてまつりける

躬恒

と改訂するのと同じく、文字の上では簡単なことであるが、実際にはそうなっていないという事実が重大なのである。つまり、歌集の文体はあくまで和歌を伝えるためのものであり、物語の文体は人物の事績を伝えるためのものであるという相違は厳として存在し、その両者を混同することはなかつたのである。もっとも、古今集や後撰集、さらには万葉集にも、後述するように歌物語を素材としたものがかなりあり、その中には物語的な詞書を持つものもあるが、それは素材としての物語の文体がそのままに投影した結果であり、従って發生史的には、歌物語と歌集の詞書とは、やはり、おのずから次元の異なつたものとしなければならないのである。

二

先には、歌物語の最も基本をなす形式を、

陽成院の一条の君

(大和物語 四七段)

閑院のおほい君

(大和物語 一一八段)

などのごとく和歌をよんだ人物を提示するだけの形においてとらえ、ついでは、

かいせん、山にのぼりて

(大和物語 五〇段)

公平がむすめ、死ぬとて

(大和物語 一二六段)

など、和歌のよみ手の、歌をよむ時の状態・動作などの説明が加わったものをあげたが、後者のような例になると、伊勢物語にも、

むかし、をそこ、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり

(五六段)

昔、をそこ、やもめてゐて、

ながからぬ命のほどに忘るるはいかに短き心なるらむ

(一二三段)

などのごとくに存在しているのである。

歌のよみ手をまず提示し、そのよみ手の事績を物語るという形式は、このように歌物語の基本と断じてよいものであるが、実際には、かように単純なケースは多くない。第一、歌物語の多くは恋愛にかかわるものであり、また、たとえそうでなくても、相手の人に歌を贈るといふ形のものが多く、右にあげたような一個人の詠嘆の歌一首が歌物語の素材になるという例はきわめて乏しいからである。従つて、

又、おなじ右京の大夫、監の命婦に

(大和物語 三一段)

躬恒が院によみてたてまつりける

(大和物語 三三段)

などのごとく、あるいは、

むかし、をそこ、はつかなりける女のもとに、

逢ふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながく見ゆらむ

(伊勢物語 三〇段)

むかし、心にもあらで絶えたる人のもとに、

玉の緒をあわをによりて結べれば絶えての後もあはむとぞ思ふ

(伊勢物語 三五段)

昔、「忘れぬるなめり」と問ひ言しける女のもとに、

谷せばみ峯まではへる玉かつら絶えむと人にわが思はなくに

昔、をとこ、つれなかりける女にいひやりける、

行きやらぬ夢ちをたのむ袂には天つ空なる露やおくらむ

(伊勢物語 三六段)
(伊勢物語 五四段)

などのごとく、歌のよみ手のほかに、歌の受け手を提示する場合が多くなるのである。

歌物語の最も基本的な形式は、歌のよみ手の提示であり、第二の形式は歌の受け手を併せて提示することであると
言ったが、第三の形式は、その歌のよみ手と受け手との間に第三者が介入する場合である。たとえば、

故右京の大夫の、人のむすめをしのびてえたりけるを、親きゝつて、のゝしりてあはせざりければ、わびてかへりにけり。
さてあしたによみてやりける

(大和物語 六三段)

桂のみこの御もとに、嘉種がきたりけるを、母宮すむ所、きゝつて門をさゝせたまうければ、夜一夜たちわづらひてかへる
とて、「かくきこえたまへ」とて、門のはざまよりいひいれける

(大和物語 七六段)

など、あるいは、伊勢物語において、昔、男が女に通ったが、他からの命令によつて、「ほかにかくれ」たり(四段)、
通ってくる男をとどめんとして「あるじききつけてその通ひ路に夜ごとに人をすゑてまもらせければ」、男は「いけ
どもえあはで帰」ったという話(五段)などは、いずれも第三者の介入が「仕手」と「受手」の關係の障害となつ
た場合であるが、先の二つの人物提示の方法に比べれば、かなり成長發展した形と言わなければならないまい。

三

歌物語の基本は、まず人物を提示することにあつた、逆に言えば人物を提示してその人物の事績を語るることによつ
て歌物語は始めて物語として成り立ち得る、ということを明らかにして来たのであるが、既に掲げた物語の冒頭の書

き出しを見る時、人物の提示と常に結びついて示されているものももう一つあったことに気づかねばならぬはずであった。

それは、ほかならぬ「時」の設定である。先に掲げた竹取物語や今昔物語の「今は昔」、うつほ物語の「むかし」、源氏物語の「いづれの御時にか」(桐壺)「その頃」(橋姫その他)など、さらには、「昔」というような漠然とした形ではなく、「純友がさわぎの時」(大和物語 四段)、「先帝の御時」(大和物語 二四段)、「師走のつごもりに」(大和物語 九二段)などのように「時」を設定するということは、物語においてまことに必要な要件と言うべきであろう。もつとも、このような見方では、先の、

陽成院の一条の君

閑院のおほい君

かいせん、山にのぼりて

公平がむすめ、死ぬとて

(大和物語 四七段)

(大和物語 一一八段)

(大和物語 五〇段)

(大和物語 一一六段)

などの場合をどう考えるのか、これらにおいては、人物の設定があっても時の設定がないではないかと思われる向きもあるかも知れない。しかし、これらの場合は、いずれも、その人名によって同時に時代の設定をも行なっているのである。つまり「陽成院の一条の君」「閑院のおほい君」「かいせん」「公平がむすめ」と言っただけで、どの時代の、どのような人であるかを享受者が知っている、そんな世界で大和は成立したわけである。

「人物」そして「時」。歌物語の基本形式を考える場合、次に提示されねばならぬ要件は「場」である。その歌がよまれた時の状況の説明である。その人物が、何時、どのような場面で歌をよんだかを必ずしも断わる必要のない場合もあるが、しかし、この時代の和歌が、いわゆる人事の自然化、自然の人事化をその根本とした以上、この面の提